女學雜誌

一冊六錢

各土曜日出版

第百八拾號

當府内無郵税

郵税一錢

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 180. SEPTEMBER 21ST, 1889.

EDITORIAL:—Benevolence.

LEADING ARTICLE: — Answer to Shōradō's Query.

CRITICAL NOTES:—"Shūmio no Mon." (The Gate of All Excellencies.)

MISCELLANEOUS:—A Wise Son. "The Parent's Affection." (A Poem.) The Woman's Education. The Youths of Today.

DROLLERY.

HISTORICAL RECREATIONS.

CHILDREN'S COLUMN.

CONTRIBUTED ARTICLES.

GENERAL NEWS.

FOREIGN NEWS.

第百八十號目錄

社説 慈善救濟

論説 中し開らき條々（小説論者筆者）

批評 衆妙之門○權謀學

雜錄 管見二則（仁田桂次郎）○すねもの○子を思ふ親の伊呂波歌○故郷に送るうた

笑草 識穿鑿○遺言は用ひずばなるまい○死なぬ中に忌中○殘りが十六文ほど○たる木の竹

見鑑 チャーレーの强情

史傳 ファンシェーブ夫人傳（田部武治）

小説 冷熱記第五章（水天彷彿）

開書 千之女史の問に答ふ

寄書 誤り易き言語（中）（依田雄甫）

新報 婦人雜誌の不德○猥褻の繪畫○貸坐敷の新設○盲人政談演説會○盲人就産會○日本演藝協會○孤兒院○公園改良の事

片々 明治女學校高等科○櫻井女學校○鶴岡婦人義捐會○女生徒の上京○皇女降嫁

WOMEN IN JAPAN.

(1) *A gentleman of Enshū noted for benevolence has contributed 500 yen through "The Jiji Shimpō Office" toward the relief of sufferers from the recent flood. The contribution is made in the name of his deceased mother who, on her death-bed 38 years ago, gave him 25 yen which she had got together by persona leconomy, charging him to increase the amount and use it to perpetuate the memory of some worthy patriot. The gentleman, in his admirable letter to the office says, that though giving this money for this object is not strictly following his mother's will, yet his commiseration for the sufferers prevents any hesitation. He gives half the increased amount, reserving the other half for another and already chosen object.*

(2) *Baron Kagawa together with 25 court ladies gives 500 yen toward the relief fund; and a Ladies' Benevolent Society also gives 80 yen for the same object. "The Woman's Magazine" is advertising for contributions to the same object.*

(3) *The "Sakurai Gakkō" is hastening the completion of a commodious new building very near its old cite.*

Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第百八十號
明治二十二年九月廿一日發兌

社說

○救濟慈善

本年は是れ何如なる年ぞや、二月十一日には憲法發布せられ、立憲帝國の礎え萬古を貫ぬきて創じめ設けられたるの太平歲なるに、地異天災の何如あれば斯く迄に烈しき乎。熊本に於ては一夜突然として地震ひ出て、天黑く星眠るとき家屋裂壞混亂して母子妻夫行く所ろを知らず、乍ち家に殘りたる赤子の泣くを聞き、母は狂るへる如くに家碎けたる中に飛び入るとき、地再たび震るひて母子ともに土中に呑まれたり、子は老ひたる母を負ひて逃ぐるとき大厦百雷の落る如くに壞れかゝれば思はず母を下して身をもて覆ふとき、地先づ割れて母を埋め去れり、夫は病みたる妻を伴なうて慰さめつゝ行くとき大地震裂して其の足を挿はさむ、妻は苦吟して地を堀らんとすれば地亦割れて其手を挿はさむ、夫妻苦しみつゝも尙ほ相慰さむとき、倒れたる家に火起りて彼等を燃やしたり、而して辛くも此等の難を免れて僅かに市外の荒原に野宿するとき又々地震るひて殺さるゝものあり、餓えて死するものあり、病みつかれて死するものあり、憂ひ泣きて殆んど死せんとするもの多し、嗚呼地は震るひて大ひなる波の如し、家は碎けて破るゝ橋の如し、一夜落入り死せるもの數を知らず、而して生くるものも尙ほ殆んど死せしが如し。

然るに今年の天災は啻に之のみならず、引續きて福岡に大水出でたり、更に和歌山にも大水出でたり、暫らくして又た奈良の邊にも大水出でたり、而して今尙ほ霖雨止まず、去る十一日の夜の如きは近年に稀れなる暴風雨全國中にあれ渡り、東京府下の如く久しく靜かなりし帝都に於ても、水溢れ、橋折れ、田流れ、二十五萬餘石の稻大方は腐り、米商會所すら取組を中止したるほどなり。然るに彼の福岡、和歌山、奈良等の水害は決して如此き事に止まらず、雨降ると連日天の底を穿ちたる如く、風亦た加はりて餘所の雨をも持來る心地したるに、乍ち山崩れ崖落ち、大流滔忽として流れ降り、岸を破り、橋を落とし、田野をひたし、人家を流し、見る〳〵一面大海となれり、而も急流矢を射が如きの大洋海と爲れり。左れば外に逃るゝ術もなし寧ろ家と共に流されんと抑ゆるとき天井より水かぶさりて集へる子等八方に流れたり。寧ろ八方に流るゝよりは共に死せんとて母は多くの子を腰に結びて待

つ、幼なきは尙ほ負われんとこそ啼かりけめ。父は外に働らきしが水溢れしと聞きて走り歸るとき家はすでに流れ出て窓より多くの子の顏出して泣くを見たり、彼れ狂亂して水中を泳ぎ來るとき流るゝ大木に衝かれ直ちに死したり。水の將に至らんとするを察し早くも逃れて一家族小さき丘に登りぬ、怒濤狂るひ奔るを見て心を冷し乍ら少さか安んじたるに、丘又た崩れて全家一同に水に葬むらる。此等は尙ほ幸わいなるものなり、遙かに子の流るゝを見て泣く父母、弟を流されて叫び立つる兄、病める夫を看護して流るゝを待つ愛妻、の如き夫れ何たる悲しむべき不幸ぞ、而して實際に於ては此よりも更に不幸なりしもの甚はだ多し。

抑そも如此き時に於ては、害を蒙むらざりし人々の之を助け救ふべきと實に天の命ずる所ろなり、見よ僅かに指に傷しても足は十里を走りて之を醫やされんとを乞ふに非ずや、人の全身中もし其一脉を害するときは他の百脉悉とく勉めて之を救ふにあらずや、之れ百脉の悉とく合して一身を爲すがゆえ也。然るに彼の同じき土地に住ひ、同じき國に居り。同じき天皇陛下を戴だく所ろの日本國民たるものは、其祖先も同一に、其歷史も同一に、其利害も同一に、其の希望も同一にてあれば、恰かも是れ一家の人の如し、否な一家の人の如くなるのみならず實に一身の人の如し。左れば熊本と云ひ、福岡と云ひ、奈良と云ひ、和歌山と云ひ、恰かも吾が手の如き、足の如き、腹の如き、胸の如き諸部分がそれ〴〵に大傷を蒙むりたる時に於ては、吾れ尙ほ健やかなる考のあらん限り何如にともして之を醫やさゞる可らず、財あらば散ぜざる可らず、口あらば相談せざる可らず、眼あらば泣かざる可らず、以て速かに傷を醫やし、全身を一活脉に復せざるとある可らず。夫れ身に於て傷したるは僅かの事と云へども騷ぎ廻り、一國の身に於て傷したる時は殆んど痛痒を感ぜざる如くす、之れ何如なる無感覺、何如なる無慈悲、何如なる殘酷の事ぞや、冷々たる人は或は若くあるべし、然れども慈悲ある人は決して如此くはあらじ、溫たかなる人は決して如此くはあらじ、況んや彼の感じ優しく、恵み厚き、慈悲の天使たる女性姉妹に於て何んぞ如此きとあらん。

故に吾人は今ま既に天下慈善の諸君子が多く之に向つて義捐せらるゝにも拘はらず、更らに之を勸告し、亦た吾人は既に各新聞社に於て之が救恤媒介の勞を執らるゝにゝ拘はらず、更らに愚案を公告す。夫れ難を助け、害を救ひ、不幸をあわ

二

れむは特に女性の務めなり、亦た其の尤も長とする所なり、故に此際に於て姉妹諸君が其の天性の高尚至愛なる慈悲心を煥發し、各其得る所ろの力を義捐して被害者を救ふとに盡力し、一人にても多く其涙を止めしめ、其憂ひを滅ぜしむるとは、實に諸君が義務なり。今や條約改正の議論沸騰して天下の耳目悉とく之に集まれり、此に於てか女性中亦た其思ふ所ろを建白し、其建白せし處に向つて同志を募らんとするものあり、之れ亦た可なるとにして吾人の決して不同意を表せざるとなりと雖へども、若し夫れ女性天稟の長所よりして之を云はゞ、條約改正の議論よりも寧ろ先づ彼の尤もあわれむべき者を憫れむとを第一とすべし、之れ女性に於ける第一の長所なるが故に亦た之に對する第一の天命なり。況んや男性多く彼の大問題に向つて忙々たるの時に於ては、女性たるもの亦た專ぱら此の慈善の事に向つて盡力せざる可らず、之れ實に男女其勞を分つて能く國家切要の事務を爲の方なり。

然らば則はち如何なる方法を以て救恤を爲さん、曰く他なし難めるものを助くべし救ふべし、何如なる方法にても人々出來る丈けの力を盡して救助すと云ふより他に良法あるなし、即はち財らあるものは之を義捐すべし、力らあるものは之に盡力すべし、財らなく力らなしと云へども何等かの藝能あれば之を捐て、其分を爲すべし、例せば能くヲルガンを奏し讃美歌を歌ふの女學生は相合して音樂會を催ふすべし、辨に達し人を動かすの口ある者は演說遊說して義捐金を集むべし、裁縫の出來るものは布子にても縫ふべし被害者今後の寒天を凌ぐに於て大ひなる助けあるべし、更らに縫針の上手なるものは賃仕事を餘計にして金を取るべし、看病婦たり得るものは彼地に趨むきて病めるものを看護すべし、其他種々の人相合すれば種々の物を造り得べし宜しく之を合して慈善市を開くべし、此等の事の出來ざるものと云へども家計に儉約し小遣を少なくし其の入用の一分を寄捨すべし、苟くも如此くすれば如何なる婦人と云へども必らず相應の救恤を爲すとを得べし之れ何等の喜びぞや。嘗て西洋の女子供が教會建立の金を集めたるを聞くに、或る婦人は日々のパンに塗べきバタを儉約したり、或る婦人は綠髮を切つて賣りたり、或る子供は其の小遣錢を儉約したり、或る子供は鷄を畜つて其卵を賣りたりと、而して近頃ろ米國ジョンストンに大水害あるや、救恤の聲四方より起り、就中く志ある婦女子八方より起り、金を捐て、力を捐て、奔走盡力して其の救濟に惜しむ所ろな

三

く、彼のクラ、バートン一流の看護婦人は、水尙ほ全く減ぜざるの河傍に病院を設けて百千の被害者を介抱し看護し居れり。　日本帝國の婦女子決して冷やゝかなるに非ず、何んぞ西洋婦人の如く慈善婦人たることを得ざる者ならんや。今や各新聞紙社天下の公衆に向つて義捐金募集の事を計らる願くは各慈善の兄姉諸君成るべく之に向つて其の惠む所ろを寄せられんことを、而して吾社は女性諸君が此事に向つて決して冷々ならざるを證し、尙ほ女性が慈善に對する功業の著しるしきを證せんと欲し、此際特に深く女性最善の美所を公明に現わさんと欲するが故に、別に左の一方を設け特に女性諸君の義捐金を募る、

婦女義捐金募集法

一　義捐金は拾錢以上多少に限らざる事、但し拾錢以下の寄附者は數人合して其姓名を一ッに記るし報ぜられたき事。

二　義捐金は女學雜誌紙上に其金額姓名を掲げ別に受領證を出さず、故に毎週月曜日迄に到着したるものは其週土曜日發行の雜誌にて廣告すべき事。

三　義捐金は必らず其の何府縣に宛て送るべきかを明記せらるべき事。

四　右明記なき者は本社議定の上へ宜しきに計ふべき事。

五　締切の時限は追て廣告すべき事。

六　義捐者は勿論女性に限るべし、故に若し性わりて名なきもの、又は無名なるもの來るときは、一切之を女性として記載すべし。

之れ女學雜誌が爲し得べき一つの法方なり、若し夫れ他の慈善方に於て吾社員の得てよく計るべきものあらば、希はくは之を命ぜよ。

抑そも此の義捐金の事たる、要する所ろは成るべく其金額の多からんことを望むにあり、何んとなれば其金額の多ければ多き程之によりて救わるゝ人の一層に多からんと信ずるが故なり。然れども義捐慈善の事たる素と只だ救わるゝものゝみを益するに非ず、實に之を救ふものを益するなり。夫れ人其品性を高め人物を立派にするより益あるは無し、蓋し美なる人となりは金及びダイヤモンドよりも貴ときものあり、特に女性に於て其の優美慈善の心を增すは之れ女性の最高最善なる德を增すものなり、苟くも之を增すことを得ば女學校を卒業したるよりも、數多の女教書類を通覽したるよりも更に價ひあ

り、然らば則はち女性が此度の震難水害に相應の義捐を爲し、若干の力若干の金を之に呈するとき、たとひ其盡力金員のさして艱難を救ふに足らずとするも女性彼等自身の上に益したると實に多かるべし、シエクスピアの戯曲に女判官ポルシアは言へらく、

慈悲の性たる强ゆるものに非ず、天より地上に軟雨の如く落ち、之を與ふるものも與へらるゝものをも幸はひするなり。

左れば、其力の弱きを憂ふる勿れ、其の金の少なきを恐るゝ勿れ、出來得る丈けの義捐は之れ、有り得る丈けの善業なり、長者たとひ万燈をかゞやかすとも、若し愛なくば貧婦の一燈に如かず、苟くも愛あらば其金、其盡力何如に少なしとも、既に能く惠まるゝものを滿足せしめ、又大ひに其の與ふる人を益す。昔し主、目を擧げ富める人々の捐輸を賽錢箱に投るを見る、又ある貧き寡婦のレプタ二つを投たるを見て曰けるは、われ誠とに爾等に告ん、此の貧しき寡は衆の者よりも多く投たり、蓋はかれら皆な其餘ある所ろより捐輸を神にさゝげ、此婦は乏しき所より其身代を盡とく獻げたれば也。

It blesseth him that gives and him that takes.

論說

○申し開らき條々

「小說論畧」筆者

拙者事女學雜誌第百七十七號社說欄内に於て、小說論畧と云へる一篇の短文章を掲載相願ひし以來、前號の本誌論說欄には松羅堂主人と申す御方、國民之友第六十二號には博士カイチと申す御方、東京輿論新誌第四百十二號には岡目八目生と申す御方、打そろうて愚見を御詰問に相成り甚はだ當惑仕候、本來餘程の卓論と心得公けに致したる處ろ、斯く方々より叱り懲らさるゝに至り初めて心付き、扨ては惡しかりしにやと篤と復讀一時は中々落膽失望いたし候ひしが、つら〳〵再考するに全く左様にも限らぬよと發明仕り、即はち左に申し開らき條々再たび畧言致し候。

右三氏の難問中、岡目八目生のは殆んど罵詈に均しく、カイチ氏のは僅かに一二件を難ずるに過ぎず、松羅堂主人の質問に至りては頭尾徹して悉く愚見に反對せらるゝものなれば、先づ之に向つて答へ、兼てカイチ氏に辨ずるところあらん、彼の罵詈惡口の言語の如きは眞理を研究する者の敢て顧むべきに非ずと思ふ。

松羅堂主人は、彼の「小說論畧」を六段に分ら、一々其大要を

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

括りて一々に駁撃せられたり。先づ序論に於て大ひに不平を述べ、余を目して「勝手氣儘に論定を下し證據をも引例をも擧げず我が思ふ所ろ斯の如しと獨斷主義に凡べて他の說を馬耳東風視するもの」と爲せり、然れども余は普通の道理によりて之を判じ三四の例證によりて之を確めたり、若し夫れ古來の議論は如此し、先人の區別法は如此しと云ことを以て唯一の論定證據とせらるゝに於ては余は隨がふ能はず、苟くも不覊獨立の思想を事々に適用するの不可あらざるに於ては、多少の愚見固より自己に據る所ろなきに非ず、而して彼の多讀多聞に耽りて彌よ獨見なきの人に同じがたきと彌よ深し。主人は其第一、第二、の難問に於て、余が所謂る「吾人遂に理想と實際との別を知らず、否な其別を知らざるに非ず、小說の理想、實際、と云ふものに至りては遂に其別あるを知らず」と云へるを罵しり、何等の論理もなく、只從來の習慣に據りて駁撃せられたり、夫れ從來の俗論には小說に理想派實際派と云へるを明別したり、並は言ふ迄もなく余が聞及ぶ所ろあれば即はち其の實は論理上に於て明別なきことを證言したるなり、然るに之を駁するに從來の習慣は如此し、從來の區別は如此しと云ふことを以てせらる、恰かも是れ林擲氏派の舊分類者は、デカンドル氏派の論者に向つて習慣然らざりしと難じ、デカンドル氏派の論者は生物學者に向つて古論然らざりしと難ずるが如し。余は云へり、一小說全篇の結構すでに戯作より成る、夫全躰の運命すでに實際に非ず而して其各部局に於て能く悉く實際に合するを得る乎と、主人敢て之に向つて辨ぜず、余は亦た云へり、彼の人此人の能く理想し得る所ろの者は豈に亦た人間の通情に非ずや、人間の通情を寫すもの果して小說上の實際と云ふことを得ざる乎と、主人敢て之に向つて辨ぜず、只だ漠然として曰く「小說の事實は皆な作者の胸中に出で實際世間に在りし事ならねば眞正のリアルにあらずと考ふるは大ひある謬見なり」と、然れども實際世間に在りしとあらず只だ作者の胸中より出でたるとは何が故に實際と稱すべくして理想と稱す可らざる乎、公平精細に論評し來れ、實際に無くして胸中より出しことを理想とせず必らず實際とすべしと云ふの愚論に至つては論理上に許しがたきものに非ずや。且夫れ主人が解釋によれば、所云るリアルとは實際にもあるべきやうなる趣向を云となり、若實際にも在るべきやうある趣向を目して實際派と爲し、理想派を明かに之より區別せんと欲せば、即はち理想派は實際に無かるべ

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

きやうなる趣向を作るものと云はざる可らず、主人が謂ふ所ろの理想派なるものは即はち是か、然るに主人は美妙齋氏の武藏野、蝴蝶、いちご姫等を以て理想なりと曰しぬ、然らば彼の武藏野、蝴蝶、いちご姫等に出でたる趣向は實際に决して無かるべきものなる乎、若し之をしも我儘勝手なる獨斷と云はずば天下亦如何なる獨斷かあらん。主人切りに兩派に別ある如く强論せり、然れども主人が其一に對するの解釋を轉じて他の一に用ゆるに更らに不都合あるを見ず、即はち、

理想派とは實際にもあるべきやうの趣向を云ふ、世間に必らずあるべき事實を案出するを云ふ、よし脚色は作者の想像になるとも實際あるべき人物と趣向ならば理想と申すも差支へあるなし、

如此く解釋し何等の不都合もなきを見て更にいよ〳〵兩派に論理上別なきを知るべし。　主人又余を責めて「記者は今日の後進が實際派にして先輩が理想派なりと曰ひしは何如なる作を標準とせしや」と云ふ、然るに余は前論に於て如此く言ひしとなし、固より理想派實際派の別なきを知るが故に前の理想派にして後の實際派なるとを判ずるの標準を有せず、只だ余が少さか論じたる所ろのものは、世上に所謂る理想派實際派なるものゝ代々一盛一衰するは只だ小說界原動反動の相激して或は陰端に走り陽端に走りたるの現象に過ぎずと言ひしのみ、「理想派其僻に極まりて實際派起り、實際派跋扈して亦た理想派を絶たんとす」、と言へるもの是れなり。而して如此く言ふとに於て必らずしも春の屋二葉亭其他をのみ標準に取りしにはあらず、凡そ小說戯曲の進化に於ては、先づ道德的の勸懲談起り、次に英雄鬼神的のローマンス起り、次に人情世態のナーベル起り、最後に高潔純善の理想小說起り來るとを信ずるが故に言ひしのみ、今の日本に於ける小說大家に付きて論ずるは甚はだ勿躰なし、假に英文小說の經歷に就いて觀察せば、先づナッシ、デッカー、カイド、ピール、ロッヂ、グリーン等を經て、ベンジョンソン、シエクスピア、ミルトンと爲り、更に亦た、デフホー、リチヤードソン、フヒールデング、スモルレット、スアルン、ゴールドスミス、サムエルジヨンソンに至り、遂に一轉してワルタースコットと爲り、更に轉じて近代のヂッケンス、サッカレーに至る迄で悉とく此れ所云る理想派とか稱せられたるものゝ漸やく退ぞきて實際派など曰せられたる種類の漸やく起り來れるにあらぬはなし。然れども今の小說家は寧ろ解剖的、觀察的、批評的

の弊に陷いり來れり、之れ一には小説經歷の然らしむるものと云へども亦た十九世紀の唯物論大勢に據りて然るにあらざるはなし、故に思ふに二十世紀の靈論復興と共に更に一新したる理想的小説流行し來らん、此れ余が敢て自信し斷言するとを猶豫せざる所ろの想像あり。　主人亦た余が美術論を駁し「又實際を其まゝ寫せし美術は何くにありやと曰はれしが曾て記者は美術は自然のまゝを取ると説かれしならずや」と、嗚呼愚見の如此く誤解せらるゝに至りては殆んど余が文章の明晰ならざるかを疑はざる可らず、余は云く終の日に至れば自然界の實際悉とく美ありとして見らるべし、たゞ今人は其眼と悉とく之を惣觀する能はず即はち自然界中に發見したる美を綜合して之を綴作し寫眞し以て美術と爲すと、主人若し幸に余が美術論を再讀するの榮を賜わらば益し如此く解釋せらるゝに至らん、彼の圓山應擧が實際を其儘に寫せしと云ふは大ひに違へり、彼れ何如なる物品をも其儘に寫して美術なりとせしにあらず、彼が其儘に寫したるところのものは即はち彼が美術上に於て美なりと觀じ得たる所ろのもの也、たとひ坊間に存する錦繪ありと云へどもたゞ實際を寫さんとして寫したるにあらず美を寫さんと欲して實際を寫したるなり、况んや彼の應擧をや、此等の畫家皆な只だ自然の儘實際の儘を寫さんとしたるものに非ず。

第三に至り、余が議論頗に一段の奇怪を進むと罵しらる、然れども余より之を見れば、主人の駁擊いよ／＼數段の奇怪を増したりと思ふ、余は今の小説家の愛情、婚姻、下宿屋、演説、政治界出世などの事を寫すを、不可としたるとなし、たゞ此等の事を寫して之れ既に實際を盡せりと云はんずるを笑ひたるもの也、主人曰く「記者は宇宙の廣漠なるを知て下宿屋一軒の中に千變萬化の奇觀あるを知らず」と、成程下宿屋一軒の中には千變萬化の奇觀あるべし、其の賄なひの飯一杯の中にも數萬の細胞數萬の戰爭數萬の愛着戀情あるべし、余は決して之を少しと云はず、今の小説家更らに若し顯微鏡でも掛け玉はんには更らに尙ほ微細に入るべしと信ずる也、只だ余は云へり何卒此等一軒の下宿屋内にのみ限らず、少しはミルトンの如く、ダンテーの如くあられたし、たとひ人情を穿つにせよ、ゼヲヂエリヲツトの如く、ビクトルユゴの如く大觀して而して細察せられよと云ふにて必竟お願ひに過ぎず。若し夫れ愛情の事に至りては、余亦た決して之を材料とするとを惡しゝと云ひしに非ず、之をのみ材料とするとを狹まし

と云ひしのみ、ジョンソン嘗てシェクスピアを評して曰く何れの戯曲に於ても主なる脚色は愛情より出で、愛情の力によりて善悪分かれ、各の行爲速くなり遅くなるとせらる、然れども愛情は此れ幾多の人情中の唯だ一つにして、實際世間に於て左程の大感化を與ふるものに非ず、故に生きたる世界を目前に見て之より其脚色の趣向を取る所ろの作者に於ては決してたゞ愛情をのみ寫すとなし、シェクスピアは即はち是也、彼れ能く其他の情の或は治まり或は亂るゝによりて幸不幸を生じ來るの莫大なるを知り、即はち亦之を寫せり。

余が今の小説家に望む所ろはシェクスピアの如くならんとを望むなり、願くは余が諸君を見るの重きに免じて暴言の譴しまざるあるを容せ。

第四、第五の難問の如きは亦た辨ずるに足らず。然れども余が道念純厚意思清潔云々と云ひしとを殊更らに誤解せらるゝに至つては敢て一言せざるべからず、余は小説論略に於て主として狹隘なる批評を不可としたり、該論一篇の精神は實に此に他ならず、希ふ所ろは小説界更に自由にして幾多の英才が其才を伸し其筆を揮ひて古來絶倫の傑作を出さんとを欲するに在り、故に亦た敢て如何なる小説を以て小説ありとし、何如なる小説を以て最良の小説なりと斷限するとを爲さず、曰く「苟くも人間眞實の想像、觀察、結構に據りて成り、而も文章美に、意匠麗にして、此の實際世間の外に一個の所云る詩世界小説世界なるものを造立するものあらば、吾人之を呼んで小説家とし、其著作を目して小説と云はざる可らず」(之れ主人の何をか小説と云へるとの問に答へ、又たカイ子氏の小説の目的を明言せずと詰られたるに答へ得て餘あり)と、何を以てか神と云ふ字、信心と云ふ字、なくんば最良の小説ならずと云はんや、苟くも「其小説社會を結構するの技倆に於て若し能く一の長所あるを得ば足れり、何を以てか彼を貶し此を褒するとを」爲さん、然れども進化の大法によりて考ふるに不德は遂に滅却して高德必らずや増進すべし、人類終極の運命は、善に移り太平にうたひ和樂に安んぜんとするに在り、人情至高の喜樂は肉に耽るにあらず人を害するにあらず只だ能く其義務を盡して良心上帝の許しを受くるに在り、故に此の大法大勢大情に隨ふものは優勝し永存し安樂し、之に逆ふものは劣敗し暫滅し苦痛すべし、故に此の論定によりて考へ來れば、後來世人に讀まるゝとの尤も久しく、味

九

あるゝとの尤とも深く、世を益することの尤も大きく、人を化する所ろの尤も高き小説なるものは即はち意匠清潔道念純厚なる小説家の作にて在るべきことを得て斷言すべし。而して意匠清潔道念純厚なる小説家によりて作られたるものは、たとひ其筆社會の毒惡を暴ばき寫すと云へども尙ほ讀者を害することなく、反つて大に之を益することあり、西洋大家の小説多くは是れ也、然るに彼の人世を見ると冷淡不信切にして、自己の心中に一定の理想をも所持せず、たゞ實を寫し惡を暴ばき徒づらに世の喝采を望みて其他に大ひなる希望なき人々の小説に至りては、余之を蛇蝎よりも惡むべしと爲す也。社會の式法は無禮なる言語をすら相交ゆることを許さず、然るにたゞ目的なく閨房の醜事を公けにして美術に適したりと思ふ、何等の魔見ぞ、余が常に駁する所ろのものは只是耳。

第六に至ては余れ主人の如く平氣なることを得ざるを遺憾とす、凡そ輿論は能く世人を左にせしめ右にせしむべし、特に有力なる批評論に至ては大ひに後生を前後上下に導びくことを得べし、若し此の力なしとせば寧ろ批評の事全く徒勞なるにあらずや、特に我邦人の如く、摸倣に巧みにして獨立獨行に弱きものは能く「時俗に阿らず流行に走らず世論に迷はず獨立獨歩するを常とす」ることを得んや、蓋し日本の無鳥鄕里に於ては獨飛すと見ゆるものもあらん、然れども此れまた西洋人に眞似たるなり、例せば西洋人の糟粕を嘗めて意味なく小説家を二派に分つが如し、今日の日本國中大抵の事皆然らざるなし、此時に於て說は天稟の才を沒せず天稟の才よく說を作ると云ふて鼓腹太平樂を歌ふものは共に國家の憂を談ずるに足らず、實に是れ宇宙を丸呑にすと云ふて禪宗坊主が因果にあきらめ隱居して寐言を申すに似たり。主人曰く美妙齋の前に純粹の言文一致を說きしものなく紅葉山人の前に雅俗折衷の文を作りし人なしと、此れ實に驚ろくべき斷定なり、美妙齋氏の文果して言文一致なりや、若し之を以て言文一致なりとせば一千年前紫式部の源氏物語は宮女社會の言文一致体にてありき、而して其論を言ひしものは以來明治六年に至る迄比々として多かりき、何んぞ方今に至つて初めて創起せしと云はん、若し夫れ雅俗折衷と云ふに至りては余れ何の事たるを知らず、將門記を初めとして凡そ漢文日本語の折衷せられて一種の日本文出來したる以來代々の歌人文人が爲す所ろ常に雅俗折衷にあらぬはなし、何んぞ方今に至りて初て創起せしと云はん。然れども主人は余が愛友たる美妙齋紅葉の二君

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

に此の名譽を歸するものなるが故に、先づ暫らく喜びて之を然りと爲すべし、即はち此二氏は實に言文一致を初めて說き起し、雅俗折衷躰を初めて作りし人と爲すべし、然れども「此二氏誰の說に迷ふて其文躰を創作せしや」と云ふに至つては余が議論に何の關係もあるなし、文躰論は現に未だ一個の有力なるものを得ず、二氏不幸にして說に迷ふの人なりとするも抑も誰の說にか迷わん。

此他余を目して、輕卒なりと云ひ、大雜駁なりと云ひ、禪宗坊主と云ひ、ユートーピヤ探見に船出するものと云ひ、曖昧なりと云ひ、朦朧なりと云ひ、さても〳〵と云ひ、自家撞着なりと云ひ、猪の如しと云ひ、弱い者いぢめと云ひ、卑怯なりと云ひ、わらゆる快ちよからぬ形容詞は悉とく惠まれたり、

余は此に至つて謹んで返呈す。

最後に四問を掲げ、第一に小說は何如あるものぞと問わる、之れ大ひある問題なれども其一部分として前論にも本論にも既に其明解を陳べ置たり。第二にリアルは何故に記者の嫌ふ所ぞと問わる、余は特にリアルあるを知らず、然れども通例に言ふ所ろのリアル小說を嫌ふものに非ず亦嫌ふと言ひしとなし。第三、、、、最好小說は、今の世になきやと問わる世すでに不完全にして人倘ほ不完全なり、総べてのものに最好の者なき如く今の小說に最好小說あるべき筈あし、たゞ之に對する遠近異同の標準に至りては前段すでに陳べ置たり。第四、道念純厚意匠清潔とは何、、、如なる類かと云ふ、即はち清潔なる意匠、純厚なる道念なり、之が前論に關するの係わりに付ては前段すでに〳〵亦た陳置たり。

要するに主人は余が一小論の精神に付て可否する所ろなく、只だ其の末葉に付きて八釜しく言わる。特に彼の博士カイ子氏の如きは、亦た一層細節にのみ關係せらるゝもの也、蓋し氏が駁論はリアリスト（實際派）アイデアリスト（理想派）に別あるとを主張せらるゝのみ、然るに余が之に別なきとを論じたるは只だ小說界を窮屈にす可らずとの論旨を現わしたる一段に過ぎず、故に此の一段に止まりて論答するは頗ぶる本志に反すと云へども、氏が解釈の餘りに奇怪にして獨り信ずるとの極めて可笑しきを見ては敢て亦一言せざるを得ず。

氏曰く英雄豪傑の大業偉績等凡て史上の、、、事柄を獲取して材料とするものは果して實際派極實派と稱ふ可らざる乎と、余は稱ふ可らずと命ぜず只だ其の理想派と區別なきを言ふ也、又曰く源氏膝栗毛浮世風呂と哲女の巻、冷熱記と比較して一を

實際派、一を理想派と言ふ可らざる乎と、余は亦た言ふ可らずと定むるとなし、たゞ其間に判然たる區別なく各自それぞれの趣向を異にすと云ふのみ。而して全論の主旨に於ては此の二派ともに均しく小説なりと云ふに在り、氏もし兩派を同等同位の小説ありとせば既に余が論旨と違ふとなし、只だ彼の徒らに實際派とか云ふを偏重し、理想派と目するものを貶して之れ眞正の小説に非ずなど僻論するものを不可とするのみ。然りと云へども、氏が兩派を見るの區別亦明瞭に非ず、視察せずして考察し實驗せずして理想するもの理想派なる乎、然らば考察せずして視察し理想せずして實驗するもの實際派なる乎、余は未だ如此き法方によりて出來たる小説あるを知らず、シルレルと云ひ、ゲーテと云へども如此く版押したる如き趣向の戯曲あるを見ず。ビーチエルストウ、其の「吾夫婦」に序して曰く、

余が小説中の人物は實際の人を寫せしなりと云ものあり、之れ誤報なるのみならず小説戯作の道理を知らざるより發するの誤解なり、凡そ小説を作るものは、其の自から知り、面たり實驗したる男女を寫すとを爲さず、先づ其戯作に向つて必要なる一二のキヤラクターを理想し創作し、其の想像固く熟して、人物恰かも生きたる人間の如く爲り來り、彼等自己の特性を發して働らき談しするに至るを待つ。然れども其の此如き想像を爲すに付きては、亦た自から知れる男女活人物に於ける智識經驗によりて導びかれ、其の創作したるキヤラクターが當に有るべきの行爲を爲し當に然るべきの境界に臨むやうに趣向する也。

之れ蓋し作者の心中を穿ちたるもの也、此如きは抑ろも理想的か果して實際的か。マコーレー、ポスチツト又た其の比較文學に於て曰く、

小説的のリアリズムとは、歷史的の事實を寫す上に更らに或る物を加ふるを意味す、即はち吾人が既に知れる人物を其儘に再現し寫眞するにあらず、寧ろ一個の人物にてあるらしく見ゆる程にキヤラクターを綜合製作するもの也、左れば小説中の人物は一個の活人間に更らに或る物を加へたるもの、一個の理想したる人間に或る物を減じたるものにてあるべし、一言するに單個の元素と、惣躰の元素とを合したる兩面の實在物を云ふ也。

苟くも學術的、論理的に小説を解するものは遂に如此く言はざる可らず、若夫習慣、舊論、先例等に拘りて安心するに至つ

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

ては、余の如く多く小說を讀まざるもの〻爲し得る所に非ず。

批評

(98)。衆妙之門　中本一册七十八頁定價二十錢　東京牛込早稻田町四十五番小林

此書は小林治郎吉氏が、男女の愛情、夫婦の親愛、一家の和睦等を以て衆妙の門なりとし、著々其利害正否を說きて年少男女に幾多の心得方を敎へたるものなり、敎旨禪味を帶び、之に西洋人の名とホームを喜こぶの近情とを加へ、一種重厚譏滯したる文字を以て論述したり、蓋し其の長所は寬優にして切迫せざるにあらんか、亦た漠然として一の徹透したる所ろなきが其短所となれり、終末に云く、

賢愚の品彙を序し智鈍の等類を分つものは實に此精神に由るものにして之れ無くんば男女に善惡の差なく高德者も破廉恥者も全く同一の價格を有す可し彼の靈秀なる精神は磅礴として才子佳人の胸間に橫わり常に燦爛たる光焰を放ちて無限の愛嬌と絕大の隱美とを有するもの也然らば何を以て精神の有無を判知せるかと云へば即はち詞色と動靜とは精神の象形と成りたるものなれば明に其言辭を察して審に其行爲を視れば其虛實を識ること甚だ容易にして如何なる方便を以てするも又之を蔭蔽すると能はざるべしカンプ*ルは精神の光輝は千万里の遠に達すれども形態の光輝は數步の外をも照すこと能はずと云へり男女の相ひ撰擇するに方りて其精神を標目とせずんば亦何を得んと欲するや。

文辭大率ね如此し。

○權謀學　　柴舟居士著

之を一科の學となし特にベーコン、アリストートルの說らを喚起して大成せしめんと希ねがふ、豈に喫驚すべき至りに非らずや、人の事業を爲す固より極めて容易ろ尤も近き方途を取るべし、而して此の容易に且つ近きの途は只だ正直なるにあるなり、古來權謀によりて一時を小成したるとあり然れどもよく大成したるものなし、知るべし權謀は決して大道に非ざるとを、君子小徑に寄らざるは其反つて遠く且つ遲きとを知るが故也、人苟くも大事業を大成せんと欲せば常に正直なるべし、啻に其目的の正直にてあるのみならず惣べての法方皆な正直にてあるべし、權謀僞計によりて一時の安さを遂ぐる如きは決して大人の爲すべきとに非ざる也、語に曰く正直なるは是れ最良の權謀さ。

教具の準備法　　　峯是三郞氏著
學校實用心理學　　湯本武比古氏譯
學校管理法　　　　林吾一氏編

三書ともに金港堂より出版せらる、學校實用心理學は獨逸人ペーマース氏の原著を譯したるものにて此度のは其第一册なり。他の二書は多く原書によりて抜擇綱 (sic)緝し學校及教場の管理法準備法を細述したり。何れも皆な教育家の一讀して助けを受くると多かるべきもの也。

雜錄

○管見二則

女子教育に付て

仁田桂次郎

近年世人遽に女子教育の必要を感じ女學校を設立し女學雜誌を發刊し女子の爲めに盡力するに至れり輿論此の如く女子教育に熱中する時に當り予竊に杞憂して日く何れの事物も進むには其の順序あり退くには其の方法あり女子教育とても亦た然り從來無學に放任しおきし女子へ今ま急忽に西洋風の教育を與へば迅速電光の如き變遷の際、恐くは德義を害し品行を紊さん若かじ漸次西洋風の教育を與へ和漢の長所美事をも亦た敢て盡く廢せざるには則ち和漢折衷の教育を少しづゝ與へて漸々西洋風の高尚の域に進ましめんにはと然れとも世間の女子教育熱は冷めずして諸方の女學校何れも佳人淑女を以て滿ち鴃舌忽ち英音を學び玉指則ち橫字を書き其の學藝の進步甚しくして以て今年に及べり其間女子にして小說作者として名を著したるものも一ならず是れ實に賀すべきの至りなり是に於てか女學校の醜聞あり。

無學なるものが僅に學問し三四年間勉強して少しく智識を得れば生意氣、不品行となるは必然の勢なり之を治するは益す深く學ばしむるに在り生意氣、不品行は全く淺學狹識の致す所なるなり之をして博學廣識の域に達せしめば惡事自ら止まん故に予は益す女子教育の盛ならんとを切望するものなり先には予女子教育の漸進を願ひしも今は其益す高尙せんとを欲す今日の女子教育の度程は生意氣、不品行の程度なり之を超へ行かば初めて完全の淑女を見ん請ふ猶預して長く此の程度に沈淪せしむるを勿れ。

女子教育熱に浮かされたる輿論は女學校の醜聞に遭ひ喫驚して忽ち反動を生じて日く女子教育は無用なり女學校は廢すべし女學は女大學にて足れりと是れ大に然らず若し女子教育を生意氣の程度まで持來て之を放任せば天下の女學生何ぞ能く生意氣の境域界を脫し不品行の範圍を出でん夫れ生意氣不品行只だ己れを知て人を知らず我より他に人なしとするとなり畢竟己れのみを知る故に己惚となり唯我獨尊の妄想を生ずるなり然れども若し書を讀み古今の賢哲を知り天地の廣大を知り造化の靈妙を知らば此の妄想忽ち散ぜん若し世間の學者君子と交らば此の謬見盡く消せん古來何人か最も謙遜なる則ち是れ學者と君子となり獄に居り光を見ずして盲となるものを治するは光を見せしむるに在り淺學にして生意氣、不品行なるものを治するは深く學ばしむるに在り。

今日の青年

今日の青年は他年の大人なり今日の童子は他年の老父なり若し今日を空ふせば何に因て他年の業を成すべきや紅顏少壯の時能く幾年かある白髮皺面專ら相待たん人生五十實に朝露の夕を待たず蜉蝣の朝を待たざるが如し七十八十は古來稀れなれば敢て望むべからず人生十歲より五十歲に至るまで四十年間のみ此の四十年間に何なる事業をか成すべき夜間眠らざるべからず三度の食缺くべからず運動散步せざるべからず學術學ばざるべからず新聞紙讀まざるべからず此等の爲めに費す所の時間を引去り實に事業へ用ゆべき時間は能く幾何ぞや遊戲も必要なり交際も必要なり事業の時間益す縮すべし此の短年月を以て事業を成さんと欲せば青年の時忽にすべからざるなり。

青年は愉快の時なり須く樂むべし神經の穎敏の時なり須く學問すべし感情旺盛の時なり須く交遊すべし血氣未だ定まらざるの時なり須く戒むべし若し青年の時を誤らば老衰の日に及で悔ゆとも反らじ何人も我が青年の時を回顧せば後悔することのみぞ多からん青年の時何故に此かることを爲せしか今の心ならば彼れはせまじきものを等の感覺其の心頭に來るもの幾何ぞや嗚呼青年よ青年の時を空ふすることなく老衰の日に悔なからしめよ春花は散り易く青年は老ひ易し青年の時勉めずんば老後を何如すべき人生若し長く青年ならば何の憂ふべきことかあらんされども何なる仙術も何なる金丹も不老不死の効はあらじ唯だ確乎不拔の精神を以て千歲不朽の事業を成さば不死の効に庶幾からんのみ若し夫れ電光石火の日月を送り轉瞬の間に一生を終らんか世に生れし甲斐やはある詩人「ロングフエルロー」の事業は長く存し。時は飛ぶか如し。と云へる秀句は青年の爲めに金言にぞある。

今日の青年は和漢洋の學を兼ねるを要するか故に最も困難なりされども文學を以て渡世せんと欲するに非るよりは深く文學を學ぶにも及ばし唯だ本邦の時文を讀み書き漢文の大意を理解し普通英語を讀書き談話することを得ば足らん然る上は各得意の職業に就くこそ宜ろしからん人各能あり不能あり殖產に長ずるものにて文學に短なるものあり工業に巧なるもの哲學に拙なかん故に各其の才の適合する所の業を行ふべし強ち政治法律哲學文學のみには限らじ今日の青年は博士を羨み學士を慕ひ學士博士に成らざれば男子の業にあらずと思はんが實業も亦た侮るべからず實業に從ひ博士學士を壓倒するの財產功名を得ることは敢て難からじ是れ或人に在ては反て立身の捷徑ならん。

今や筆を擱くに臨み青年に告げん惡き友と交る勿れ惡き所に行く勿れ酒類をば飲むべからず不潔をば語るべからず忍耐を勉めて力行を勉めよ寬容を勉めよ心切を勉めよ謙遜して誇る勿れ義を守て欺く勿れ恩を賣る勿れ人を羨む勿れ人の感情を傷くる勿れ人の財產を貪る勿れ自ら力めて自ら樂めよ。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

○すねもの　（上）　　露伴閲　蓮矢子譯

私しは此夏避暑の爲め鹿野山に行かふと思ひました幸に上総に親類がありますから兩親から手紙を貰ふて―其外土産の品々白粉簪香水は女の子に又男の子には都の花とスマイルス氏のセルフ、ヘルプとそれ〴〵行李に積込みました。

永代から蒸汽船に乘て十一時頃に木更津に達きました横田―親類のをる村は丁度木更津から三里程隔ていますが少しは名のある村で往來に呉服筆墨紙類を初め傘下駄油味噌醤油足袋等に至る迄を一軒で商ふ家が慥か二軒ありました向ふへ着てから二日計り經て愈々明日は鹿野山へ行くと極て行李の内から兩眼鏡を取出して曇を拂ひました供を付てやらふと向で云ひましたけれど私しは嫌ひました何故と云ふに私しは此の家の田舎馬に乘て勝手に駈たいからです此の事を話したら早速承知して借して呉れました鞍の代りに大きな坐布團手綱の代はりに細引轡は繩とんと狂言の五郎です。

その日は朝三時頃に出立しました元來私しは朝早く運動するのが癖で毎も上野の中を一廻はりしてから朝飯を濟しますまだ夜が明ないで西の方には月が微に光を吐ています草叢に鳴く虫―鈴虫か松虫か―が誰に聞かせようともなしにないています一里程も行く内に夜はほの〴〵と白みました百姓はちらほら鍬を擔げて畔を通り馬方は睡そふな顔をして馬を追ひます日の光もだん〳〵と草叢におよぶと昨日の晝中は萎く枯凋んで居た草も今日は一層の化粧立して水のたるゝやうな―イ、エ葉末には昨夜の露の名殘りがあります朝日のそれに輝く景色兩方の草原は見渡す限り青々として遙か先きには鹿野山の諸山が雲に隠れて裾を顯して居ります青き布を彩る花蕢は女郎花、紫は桔梗、白は風呂草、紅は撫子、其他名も知れぬ草花各が氣儘に咲亂れて東の方を向て太陽に御禮を伸べています私も一枝折て胸へ挿ふと思ふて馬よりをり手綱を左の手に握り右の手で草花をつみ初めました此桔梗を取ると最ふ少し先きの撫子がどうぞ摘で呉れろと頭を差出しています桔梗をすてゝ撫子を取ると隣の風呂草が何故撫子のみです私もと恨みを陳べる様です暫く彼方此方の花をつまんでいる内知らず知らず左りの手を脱かれましたか馬は一散に道を横ぎつて……

是れはと驚ひて持つていた草花を撒出すと同時に一所懸命に跡を追ひましたが私しが急ぐと馬も急ぎ私しが息が切れて遲くなると又馬も緩々歩み丁度乗馴れぬ私を嘲るようです三町

餘りも驅けましたが中々つかまりません兎角する内小糸川の川邊に出ましたが馬はささと川を打渡りて向へ逃げ出します此所には橋がありませんから仕方なく手早く靴を抜ぎズボンを上て向へ渡ふとする時向ふの鎮守の森から八歳ばかりの子供が馬を引て川の中を渡しながら御客さまー御前が逃した馬だろうと叫びました私しは有難と言ひながら此度はしつかりと手綱を取て子供を眺めました額の廣くして智惠のありそうな眉の濃く太くして福々しさ頰の薔薇色して健康そうな口のキリヽとして決斷のよきを示したるァヽ宜ひ子供だと思ひました。

余「其方はよく早く私の馬を捕へて呉れたね實にいゝ子だ若勞賃に何をやらふかと云ひながら余は隱袋に手を入れたり

小「御客さま何にも入りません

余「イヲナイ是は不思議だ其方の樣に言切る者は滅多にない然し貴樣は野で何をしているのだい

小「ハイ馬草を苅たり又家の番をして居ります

余「豚牧かい貴樣はそれが面白かいあんまり………

小「中々面白ふ御座ひます此んな宜ひ天氣には

余「然し貴樣些と遊びたいだろふエー

小「何に此の仕事は苦もなくつて全るで遊んで居ると同樣です

余「貴樣を使ふのは誰れだい主人持かひ

小「イヽエ私の親父ですアナタ

余「親父かい何處に住んでゐる

小「アヲ直向ふの森の中に屋根が見えますすと　指せしかば余も延上りて見たりしが藁吹の古い家でした。

○子を思ふ親の伊呂波歌　　稻葉臨隣著

い　いづくの親の心根も
ろ　愚となく智となくみなおなじ
は　初て赤子の生るれば
に　日夜心にいたはりて
ほ　骨の折るも厭ひなく
へ　平生母は兒が泣けば
と　取るものさへも取りあへず
ち　乳をのませつあぐさめつ
り　兩親なにからなにまでも
ぬ　拔目越度は更になく

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

る　縷々と睦言くりかへし
を　折にはてづから見もりなし
わ　我身の事はうち忘れ
か　可愛やいとしと思ふ兒の
よ　よろこぶ顔を樂しみに
た　體をば育るのみならず
れ　禮儀や作法や身のゑつけ
そ　疎略のことは戒しめて
つ　常に智惠づく事柄を
ね　寐ても起てもをしへつゝ
な　ならわしまでも氣を付て
ら　樂々暮す日とてなし
む　夢我夢中のをさなごが
う　飢ゑに寒さに泣き號ぶ
ゐ　坐ながらさへも尿屎し
の　のみくひ起き臥すその世話は
お　親の丹誠いかばかり
く　苦勞も子の爲め先越して
や　やみいせぬかと案じつゝ

ま　まめのみいのる親心
け　實に親しきは朝夕に
ふ　父母の膝下に可愛兒が
こ　心地もよげに打笑ふ
え　衣食調ひあたふれば
て　手なづき慕ふ愛らしさ
あ　嗚呼世に樂しみ數あれど
さ　さばかり樂しきものあらん
き　氣儘に遊ぶ親のもと
ゆ　夢にも忘れぬ我が子には
め　面倒も難儀も苦になさず
み　身にはかへても心配し
し　眞に不爲と見るときは
ゑ　會得するまで異見なし
ひ　人となしたる親の恩
も　若しも子として報ひずれ
せ　世人も許さぬ不孝の名
す　則ち禽獸におとるらん

愛の中に懼あることなし、全き愛は懼を除く。

○故郷に送るうた　　鈴木弘恭

左の一篇は某女學校生徒某が故郷にかき贈りしふみの奥に添へられたる歌なりとて卄の友人より投寄せられたれど語調閑雅にして自づから雄壯の意も含めるは眞に女生徒の赤心なるべし數百里の遠國より府下に來學して居玉ふ女生徒諸氏の心は皆かばかり際罔にこそありたけれと願はしくなん

「あしたの門には。いつくしき。我がいもうとや。待あらん。
夕べの門には。なつかしき。我がたらちねや。待まさん。
よしやひと〳〵。またば待て。ふみの林に。入からは。
おくの奥まで。ふみわけて。高嶺の紅葉。谷の花。
をりてかざして。としごろの。おどりを見よと。故郷に。
かへらんところ。おもふあれ。その歸る日を。人とはゞ。
今年の秋か。來年の春。」

○歲穿鑿

貴様はいくつにならしやる。五十近くさ。その五十近いも久しいものほんのとしはいくつだ。まことは五十三。それ六十近い。ハテ五十の方へ近い。

○遺言は用ひずばなるまい

右と云へば左と云ひ左と云へば右と云ふねじけもの。今日はお天氣さふな。ハテ雨が降ればよい。これ悴人はさふしたものではあいぞ萬事素直が肝心じやお天氣さふなと仰しやれば結搆ですと云ふものじやおれも死ぬ間ぎはだから云ひをくがなんでも世間並にすれば賛められるダガよおれが死んでも物入すな菰に包んで川へ捨てろとあまの邪苦の子息にわざとそむけて遺言すれば扨々是迄は御苦勞掛けてすみませぬ是からは萬事素直に致しませう一代一度の御遺言の事これ計りは用ひずばなりますまい。

○死なぬ中に忌中

手廻しの男親父が傷寒を煩ひつくと表へ忌中札を出した。親類共合點せずあんまりめつさふな葬式の用意は内しやう忌中札は表向き近處から悔にも來るものだ引こましたがよい「ナニサよく見さしやれといはれて見れば肩に近日々。

○殘りが十六文ほど

酒好酒が飲みたいが錢がないと悔む故女房氣の毒に思ひ髮の内をクルリと剃り二十四文に賣り酒を買ひ亭主に出す。是はどふして買たと曰へば餘りお前が飲みたいといわしやる故此通りと中ぞりを見せれば扨もそちは眞實なものと涙を流しながらまだ十六文ほどはある。

○たる木の竹

或者の友を呼び新宅だ見てくりやれ「ム、よく出來たたる木を竹でした處がどふもいへぬが節をぬいたか「イヤぬかぬがなぜだ「燒ける時はねてわるい。

兒藍

○チャーレーの强膽（中）　しづ音

マリーはまだ歸り來ず雨風はます／＼强くなります、河端に茫然として見て居る處で何のかひもありません自分の家へ歸るのも遲なりますがしかしもしも此儘歸なばマリーの母は心配して病若が重るかも知れませんがマリーを連れて歸らずば折角の志も無になる道理いろ／＼と思案をしてうか／＼歩ひて居るうちにまた／＼マリーの家の門口に立もどりました。狂ひにくるふ風の音いさみに勇む雨の響軒のかたむきかけた家に當るそのさま懐さ恐さに身をふるふ計りですが大膽なるチャーレースは物の數とも致ません病人の様子をソツトのぞきこむにまだ起きて居るようです、ぬれたよ上着をぬぎすてゝ寢臺の傍らへ參り以前のとうりいろいろと問ひなぐさめました、時にマリーの母は柱時計を打ながめましたが。もしチャーレーさんどうぞストーミー、ランタルンを以て門口に立て戴きたいものですがもう十分立つとペンシルベニヤからの滊車が通りますからいつもなればマリーが出るのですが折惡しく居りませんからいろいろの事を願うようデスが何卒合圖の燈火を出して……。

何に譯ないとデスお案じには及びませんが河の橋が流れて居ますから。　橋がそれは大變です滊車がもしその橋にかゝりますと乘てる人はみな死なねばなりません、マリーが母の吻は蒼白うなりました、是れを聞たチャーレーは何の猶豫もありません　手にランタルン（燈火）を提げたまゝ飛びだしました、遠くにはかすかに風の音と共に滊笛の響が聞へます、チャーレーは線路の眞中に直立つて滊車の來るのを待つて居りますと長蛇の如き列車は青色と赤色の光を發し十分なる速力を以て進み來たりましたこれよりチャーレーの强膽を顯はす一段になります。

適種生存の理は惠みある天理なり之れ强き者有用なる者を殘し、弱きものを殺して神の工の現はるゝを善くす（マコッシ）。

史傳

○ファンシエーブ夫人の傳

田邨武拾

アンナハリスンは英國バルスの人ジョンハリス氏の女にして千六百二十五年三月廿五日倫敦に生るハリスン孃は高等なる教育を受け最も佛語音樂及び精密なる技術に長ぜり且つ身体强壯性質活潑にして頗る膽畧あり又善く馬術に長ず然れども賢明なる母君の死より釋然悟る所ありて專ら心を家政に留め温柔優雅復た昔日の孃に非ず時に年十有五。

此時に當て國會及國王の間に爭を生じハリスン侯は最も心を王室に竭し彼の不幸なるチャーレス王と百艱を嘗め千六百四十二年幽囚に就けり其後侯獄を脫せしと雖とも家財は盡く沒せられ妻子離散して老少飢餓に號ふに至る已にして嫂りチャードファンシエーブ君に嫁し最も質素に婚儀を擧け家僮に三十磅の貯蓄ありしさぞ其貧思ふべし先是ファンシエーブ君職を陸軍秘書官に奉じければブリストル派遣の命を蒙り獨り任所に赴く時に夫人は病床に在りて其嬰子を喪へり若中兒を失ひ悲中夫に別る。

未だ幾ならず君夫人を迎へんとて數人の兵士を送りしも兵亂の時道路危迫辛ふして主從とも安全に到着するを得たり君大に喜び救急の資に充つべしとて百磅を與たり此の時チャーレス王殆と僕御の其傍に侍するなしファンシエーブ君夫妻獨り心を盡して日夜奉仕して怠らざりし。

ファンシエーブ君。王の寶石を藏せり一夜賊あり君が不在を時として之を竊んさす夫人遂に之を追ふ事聞へければ其後は番兵を送られたりさぞ一千六百四十年君王に從てシヽリ島に出帆す姦吏あり水夫と謀りて盡く君の貨器を奪へり夫人は風濤の險惡なる爲に痛く惱まされ遂に之を知るに由なきのみならず着港の頃は半死の姿となれり其上陸するや粗造なる茅屋へ海濱に就きたるに床下敗魚充積して臭氣に堪へ難きも其夜は疲勞の爲に熟睡するとを得たり明朝に至れば曉露霜を擺て客夢を破りしに豈計らん夜來風濤の烈しきにや寢床の下潮水滔々たり去れば已を得ず此所に留るを斷尉盡し此の間の艱苦は常人の悲泣愁訴する所のもの多かるべきも夫人は從容として曰く吾れ等日常の糧を受て生命を全ふするは神の惠なり左れども亦今や苦痛に堪へ難し一飯を經る每に早や此世の別れに近づきし如くに思はるゝなりさ唯流離顛沛の間も心常に道を離れず能く其人を慰籍し奨勵し百磅艱集の中に屹立して精忠貫日の義氣を挫折せしめざりしは抑夫人の功と謂ふべし。

其後王ジョルセー島に移る君亦隨ふ已にして夫人第二子を生む時に太后の命に因りて職を免ぜらる同時に君の兄カエンに在るもの大臣に擢りければ君夫人と共に同所に趣き程なく夫人は獨り家財を聚る爲に英國に還り國會議員等の力に依て成効せしかば遂に其人を迎へて船渠に住めり翌年眷家を擧てパリスに移りし後も王家の爲に大に盡す所ありて頗る公族と相結納せしも時運拙なくして百事抵悟し夫人は再び資金を募るために英國に還りしに途中難船に逢ひ辛ふして生命を全ふし遂に四千磅を獲たり。

コロンウエル勝利を得てラパート侯敗るゝに及てファンシエーブ君アイルランドに遯れり一夜夫人は俄に礟然さして砲聲の響くを聞くや「コーク」の市街は既に敵手に陷りたり家人戰慄して爲に所を知らず夫人剛毅にして膽勇あり速に家人を指揮して用意を作さしめ躬ら書簡を認て「キンセール」にある其人の許に送り更に其人の職務に關せる軍務の記錄を集め(此後コロンウエル城に入り此書類を搜索すれども得ず大に失望せり誠に夫人が智謀は能く敵をして味方の機密を知らしめず大功と云ベし)且一千磅の金を所持し二人の僕を從へて市長ジエフリー氏の許に詣り旅劵を請へり斯て白刄の街を踏み叢林の巷を經て遂にキンセールに着しければ君の喜び一方ならざりし。

既にしてファンシエーブ君ヒリップ王の命を奉て使をスパインに蒙らんさし舟をギャルウエー港に發しグラナダを過る頃彼の宏壯炫燿なるアルハンブラの都を縱覽し勇士の心何事をや思けん慨然として感ず可憐一片の精忠は骨髓を埋むるも天涯萬里客丁の客となり剩へ遊說力なくスパイン國を後に見て再び還る佛國の途に上れる心事こうい𛀁悲壯に思はれける船颶風に遇ふて破れ僅に身を脫してパリスに着せしは實に千六百五十年十一月中旬なりし。

君歸るに及て太后厚く君を侍し男爵に封ず尋ひて命を奉じてスカトランドに赴きしに同國にては速に承諾を受け王家の爲に扶助を與ふるを約せり時に夫人復た英國に行き二人の小兒を携へて船渠に住めり家居寂寥加るに世亂れ人騷き夫婦は離隔し父子は離零の有樣なれは夫人は唯朝夕其人の安全を祈り其人及老父よりの書信に接するを以て一大至樂となせり此時夫人復た一女を擧け內外の苦勞一層の度を加ふるの際ウヲルヤスターの戰報に接したり而て其人の生死判然せざると見きり三日夫人は之を感て狂する如し間もなく君執へらるさ聞き少しく安堵の思をなせり既にして君倫敦に檻送されしかば夫人は每朝四時を期して必ず獄窓の下に行き霎時の談話をなし時に降雨の衣裳を濕すを覺へざるに至れり。

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

コロンウエル深く君を敬し切に己れに從はしめんとす君節を執て屈せず已にして病に罹りて四千磅の償金を拂ふとに由て放免せられたり夫人躬親に侍して衣帶を解ざると數月疾癒るに及て千六百五十三年三月を以てタンカースレーパークに退隱して專ら心を詩歌文章に用ひ優然として儷匹と共に閑日月を送れり。

一千八百五十八年コロンウエル死するや君再び起て巴黎に赴き茲で家族の出發を俟せしに夫人は深く旅券を得難きとを察へ先づ自ら粗服を被りて貧家の婦に扮裝し官衙に詣り詐て曰く賤婦はアナハリスンと申し一商人の妻なり然に良人パリスに行き近頃家族を迎んとて使を送れり由て吾等同所に赴く爲に旅券の下附を希ふなり官吏は旅券を請ふものは一クラウン(貨幣の名)を拂ふべしと夫人一クラウンとは吾等に取りては大金なり一人毎に之を拂難し希くは三人の小兒及二人の從僕を免ぜられたしと官吏は之を承諾せしかば夫人は厚く之を謝し急ぎて旅舍に還り巧に旅券の記名(ハリスン)を變じてファンシエーソに作り用意全く整たり。斯て夫人は公廳に詣りて旅券を出したれば吏員は之を許せしも竊に此の騷亂の中家族を率て他國に移るとは解し難きとになん思しも獨り夫人は心に喜びたり船カシナスに着せし頃英國にては夫人が逃亡のこと發露して追捕の吏員を送りたりとのとを聞けり轉てパリスに入りて良人に會してブラスセルスに赴けり同所は王公當時の住所たり。

チヤーレス王位に復するや君を以て國務卿に任ぜんとを約せり然るにクラレンドン侯の奸謀に由り之を妨げられしと雖ども王厚く君の夫妻を流し恩遇頗る渥隆なり千六百六十二年に至て君アイルランドの內閣大臣となり翌年八月ポルチユカル國公使に任ぜらる君カリスボン府の邸宅は華麗を窮極し又能く同國貴族の信憑する所なりしが駐劄僅に一年にして召還さる國王皇族皆厚く君に贈れり越て一年スペイン駐劄公使に任ぜらるスペインは風俗都雅人士優柔文物の雄麗華美當時に冠たり左れば待遇の優渥なる衣冠僕婢の完美なる邸第車馬の壯嚴なるファンシエーソ夫妻をして實に多年轗軻四方に流寓して或は雞鳴狗盜の客となり或は深夜楚歌を聞の人たりしとは杳然として隔世の事なりしかと思はしむるに足りて厭る琴瑟和樂の趣を全ふせり斯てグラナダ都門の感慨ぞ今や思ひ知られける。

斯る富貴の身となりて恩寵榮譽兩ながら闕然する所なく人生の幸福之に過くるなし然ども夫人は常に幼兒を撫して誨へて曰く爾が父母は決して斯る富貴を好むものに非ず吾等は常に自ら畏れ戒むものなり余は今日廣く英國に殘せる故山の草廬を懷はしく想へるなりと一日スペインの皇后陛下より寶玉を賜はりて我之を贈る所以のものは啻に夫人が公使の妻たるを以ての故に非ず實に我は平常深く夫人の高德を欽慕するを以て事情已む能はざるに出づるなりと云ひ送られたりとぞ夫人又常に自ら戒て余は拙劣怯懦當に艱難に臨て剛勇と歡喜を以て之に當ると能はざるのみならず安樂の日に遇ふて善く之を全ふすると能はずと謙し夫人が一生の快樂を極しは實にスペイン在留の時に在り。

然れどもソロモンの榮華の極の時だにも其裝この花の一に及ざりき悲歡は糾纒の如く人世の流轉は窮なきものにこそ一千六百六十五年チヤレス王スペイン大臣と條約を締結せし際君既に調印せしも王之を允準せずして召還の命を蒙れり時に君熱病に罹り再び起ず遂に黃泉の客となりければ不幸にも王は俸給を與へず左れば夫人は之を得ず許て國王以下より賻與に關する寶玉を典して日用の供給に備るに至る甚きに至ては歸國の旅費さへ與へざれば今は夫人も五人の兒を攜へて如何ともすべきなきに至れりスペイン皇后陛下は深く之を憫み若し夫人にしてキヤソリク教を奉ぜんには毎年三萬ジユーカツ(貨幣の名)を施すべしと云送りしに夫人は厚く其恩を謝して固く其賜を辭し跪きて偏に神の冥護を祈れり夫人は良人の骸骨を埋むるに忍びず數月間櫃にして之を藏せり既にしてスペイン皇帝及諸大臣よりは弔詞をオーストリア后よりは二千ピストールス(スペイン國銀錢の名)を贈る古來スペイン駐劄公使の家族にして榮譽を以て來り悲慘を以て還ると吾等の如きものなかるべしと。

同年十月三十日英國に還り君が柩を葬る儀文整然能く良人が生前の名譽を全ふせり越て一年チヤーレス王は夫人の爲に恩給を贈り安樂に一生を畢らしめ一千六百八十年享年五十五歲にして永眠に就けり夫妻居を同ふすると二十二年其良人を愛すると一日の如く死に至て渝らず。

嗚呼夫人は眞の女子なり愛に富み信仰に富み亦能く筆に富み文にして華ならず質にして野ならず機を見ては矢の如く進み危に臨みては山の如く安し剛中誠を含み柔裡不屈の氣を寓す能く良人を流離顚沛の間に輔けて其忠節を全ふせしむ以て安樂を俱にすべく以て艱難に居るべし然則夫人の樂む所は一眞理のみ嗚呼夫人は曠世の女丈夫哉。

○フランセス、ホッジソン、バーチツト夫人曰く、人は様々事を想ひ、其頭らの中、心の周りに數多の美くしき理想を漂よわすこと實に面白き限りなり、されど之を寫して詩となすか、刻みて像となすか、作りて詩歌文章となさねば人を益するとなし、故に物の成功は考ふるにあらずして働らくにあり、妄想するにあらずして爲すにあり。

小説

○冷熱記

北邨俊士録

第五章　水天彷彿

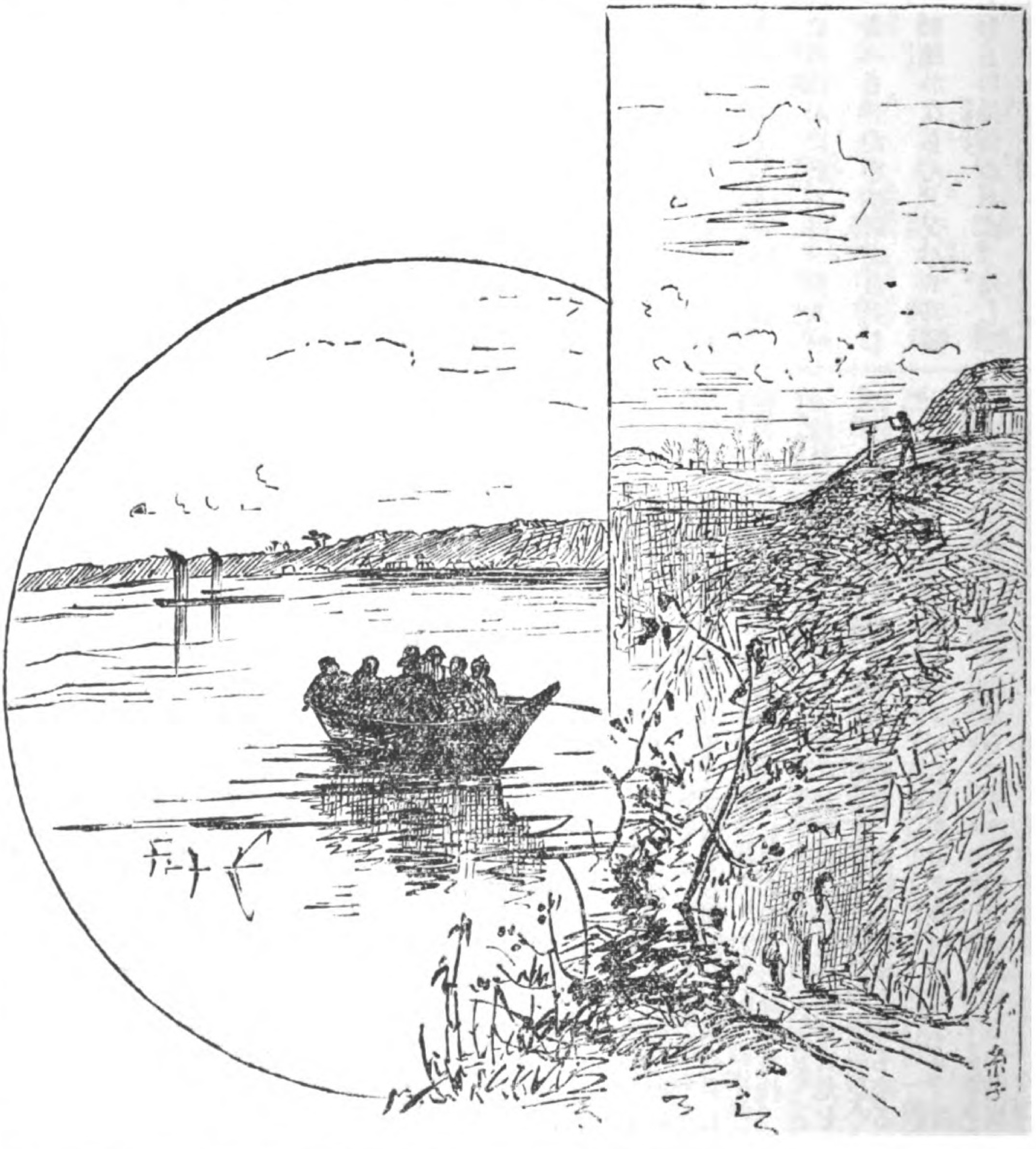
果して余が推察に違はず、雲井は實に驚ろくべき事を成さんとしたるなりき。元來彼の退去せられたる面々の中にも、亦固より温厚謹愼の人なきにあらねど、其多くは大底過激急性の輩らにして、純然たる極端の政理を直ちに現世に實行せんとするものなれば、其議論の自づから粗暴に渉りて行ひの規矩に外るゝと少なからず、突然法網下りて一夜の中に數百人都の外に退出されたると聞き瑱珠腐木を一つに打ちたる憾みはあれど、時の政略より考へ見るに必らずしも責むべき理はりのみにあらず、左れど退去せられたる面々は一向に自から悔ゆるの念なく、轉たゝ政府の暴戻を憤うりて彌々烈火を烈しくしたる狀あり、斯る擅制專横の政府はすでに其天命を破りたるものにて人民必らずしも之を奉戴すべき責任を有せずと論じ、より〳〵相集ひて只ならぬ不平を洩し合ふとのありしが、凡そ同じき不幸、同じき恨みは、人の心を容易く溶き合はすの魔力あればにや、彼の不平の徒は早くも一團一團と相結び來れり、而して其結ぶとの固きや尋常盟約の比に非ず、寧ろ死を以てだに事を成さんと欲するの決心にて最と確密に團結したり、若し暴れたる野豕を以て恐るべしとせば暴れたる人類は更らに恐るべし、暴れたる一匹の野豕を以て恐るべしとせば、暴れて徒黨したる人間は更らに尤とも恐るべきなり、彼の不平黨の一隊實に此の者の如し。

人間固より不平なるとあり、若し人情然るべき不平にて不平なるときは尙ほ之を怨るすに足れど、彼のくねりたる蛇の如く、怨まざる樣して怨み骨髓に徹し、冷々平々に持なして心中肉を食ふの遺恨を鬱結し、人を煽動し、世を騷がし、殆んど眞理義務を忘れて只だ其不平を洩らさんとするものに至りては實に惡魔よりも惡しきなり、而して如此き不平の徒は彼の淡泊なる慷慨の徒あるを見れば直ちに甘言もて結托し、義人の怒りたるを遺恨的の怒りに移し、小供的の不平なるを妻婦的の不平なるに變ぜしめ、此の怒り不平をいよ〳〵大きくして僅かに自己の恨みを醫やすものなり、天下行く所ろとして如此き徒あり、現に彼の退去せられたる面々の中にも亦少なからず在りしとと見えたり。

左れば此の姦略ある不平徒は甘まく他の仲間を動かし乍らも、本來自己の心中の潔ぎよからぬに照して自己の計事の正し

きとを信ずる能はず、寧ろ盜人の夜る家を窺がふ如くにして計畧し、懼々戰々として敢て確立する所ろなし、彼等は勇猛なる他人を先きに立て身は尤とも安固なる後陣に扣へ居らんと希望す、左れど事成るの日に於ては眞先に進んで其功を奪はんとを熱望す、元來正しき怒りによりて事を爲すにあらねば失敗を恐るゝとも非常なり、故に失敗ありと信じて敢て決行するの勇なしと云へども、亦た失敗なしと確信して強く安んずるの勇亦たあると無し、此に於てか万一敗るゝ時に於ては如何んせんと深く掛念するなり。

勇悍猛烈の壯士は奮然として慨す「吾等が事を爲すは正理の爲



めにするなり、たとひ事敗れて身四裂にせらるゝとも、凛々たる義膽は七生に殘りて能く世人を泣かしむべし、吾等が先づ苦しみ死するは他日の人心を動かすものあり、元より成功を期す可らず、たゞ後年の志を繼ぐものを起し得ば足れりと云ふ、其志ざし淡泊にして勇ましく、爲めに鬼神をも泣かするの烈あり。

左れど彼の姦畧あるものは之にて滿足するを得ず、徐むろに同志の人に說きて云へらく、壯士の論まことに快なりと云へど、事を鄭重にせざる憾みあり、吾等もとより一身を惜しまねども、亦た一身を輕んずるものに非ず、たとひ近く成効を期せずとも、特更らに成効を度外視すべきにあらず、特に一敗身死してたゞ志ざしを遺すと云ふこと、此の陰險不信の世の中に於て必らずと望むべきにもあらず、故に之を計るに現今世上に於て忠正眞實の聞え尤とも高き義士數人を語らひ、之を吾黨の仲間に混じて堂々世間に打出んに於ては、世人が吾黨の誠とを感ずると一層に深かるべし、たとひ事成らずして敗るゝとも正名を遺し得ると更に確かならん、況んや吾等今ま生きて此の義人等を加黨せしむるの技倆あらば、死して後人を動かすの感化あらんと云ふはほと〳〵危うし、現今の吾黨に人なしと云ふにあらねど、黨外に名ある義人の高く存すると亦た爭そひがたし、此等の人にして万一吾黨を目し不義の仲間なりと斥ぞけたらんには、吾等が困死忠魂も亦た少なからぬ妨たげを受ると云ふべし、故に今の要は先づ此等著名の義人若干を引きて吾黨の志ざしを贊けしむるに若くなしと云ふ。

一とたび聞くときは其辨至つて可し、亦誰れか之に不同意を表すべき、況んや彼等が推薦したる第一の人には、此黨壯士の夢寐にも慕ひ慕ふ雲井龍にてあらんには、誰か喝采唱贊して其說に同ぜざらんや、斯くして彼の蛇の如き不平徒は、舌を動かして雲井を導びき說きたり。

雲井は感に强く、義に勇さむの質なれば、凡そ不義不德の談を聞けば我を忘れて躍り立ち、如何なる艱難をも顧みずして德義を伸さんとするの勇あり、特に民の自由の痛められ、兵力權勢の暴を爲すと聞くときに於ては、自己の生命安危を心に掛くると既に不善なる如く感じ、何等の結果を起し來るに拘わらず先づ其義務を爲さゞる可らずと覺悟するなり、故に一と度び彼等の詭辨に激せられて亦た靜思沈考するの惰安んぜず、念頭すでに荒立ちて心中に暴風烈颪起れり。

人間は皆な弱點を有せり、若し余一身が大ひある弱點を指摘せば時に事を寛裕にするの癖あるべし、故に機を誤まり、物を冷視するの過まち往々にして之れあり、之れ又た大ひなる欠點なるが、雲井に欠くる所は、恰かも余れと相反し事物を見ると餘まり過激にして事に感ずると寧しろ熱きに失するなり、余れ嘗て彼に戯むれて言へるは、古し支那に哲學者あり、嘗て筍を見る、其日に一寸を伸ばすを測りて乍ち喫驚し、一日長ずると寸ならば、十日にして一尺、百日にして十尺、千日にして百尺あらん、如此くんば三年ならずして吾家篁林に覆はれ沒せんと憂ひ、急忙之を切り去りたり、君が事物を憂ふるの鋭敏なる寧ろ如此き癖あり、世事多くは大勢によりて決し人力の得て動かす可らざるものあり、君少しく心を安くし遠く計る所ろあれと言ひて打笑ひしとあり、此れ一席の談しなれど余が雲井に就きて掛念せしところ實に此如くなりしが、彼れ果して其美所によりて人に誤まられたり。

後にて聞けば、雲井はいよ〳〵彼の不平徒と結托し、或る日くれ方より品川沖に船を浮べ、遠く四方を望みて傍へらに聞くものなきに安んじ、さま〴〵の計畫を爲しつるとか、蓋し雲井の策とせし所ろは、短兵急に迫まりて帝都を混亂せしめ、主ある大臣を擒虜にして、政府の主權を握り、居る三日にして四方同志の兵の起るを待ち、恰かも人の胸を扼する如くにして國中の大勢を定めんとするに在りしとぞ、左れば一朝事を擧るの日に於ては、壯士三百五十前より密かに北京に入り込み、都の四方に隱伏して合圖を待ち、機到り烽火揚るとき、一隊は中央電信局に亂入して電信を絶ち、一隊は警視本局に亂入して警報を止め傍わら局長を縛し、一隊は各兵營前の橋を落し兼ねて近傍に火を放ち、一隊は手を分ちて都二方の鐵道を毀ち、更らに一隊は其員を八方に配りて家を燒き、同時に監獄を襲ひ、各省に亂入して帳簿を奪ひ、最後の一隊は總長に隨がひて極秘の策を執行するの手筈なりし由、其の大膽ある頗ぶる驚ろくべしと云へど、計畫の粗鹵漠然たるに至りては更らに驚ろくべし。

然るに之を幸と云はんか、若しくは不幸と云はんか、彼等が船に相ひ談ずるを水天の外に聞くものなく、魚鳥の外に見るものあらざりしとき、唯一つの遠鏡は不思議にも先づ之を疑がひ眺めたりしと云ふ也。

開書

○千之女史の問に答ふ

社末某

女史が某友人に信切なるの情、紙面に溢れ、又た其友人某子が愛情に切なると實に感ずるに堪へ、當今浮薄の世の中に於て多く得がたきの姉妹と惑ひ參らせ候、但し御問の事に付ては抑も婚姻なるものは何如なるもの乎と云へることを考へ候はゞ直ちに判別せらるべき欤と存じ不肖を忘れて敢て御注意申候、蓋し婚姻とは男女其情を一つにし相約して志を共にし苦樂を合して國家の益を計るべきものに候ふ上は、本心に於て情を供へがたき人、苦樂を共にするの信なき人に向つて手を與ふるは既に道に反きしとと存じ候、ゆえに其某子にして若し他を顧みるの情あらざる以上は他に嫁するは實に其一身の不幸なるのみならず併せて先方の男子を不幸にするものならん、左れば斯る人は婚姻必らずしも萬人の爲すべき義務に非ざるの道を守り、御申しの如く多年の希望に隨ひて勉學獨立し世の人の爲め御盡しあり滔々たる世界を以て其の家となさるゝ方宜しからんと考へ候、よりて女史も亦た左樣に御勸めの方可然かと存じたゞく愚考のまゝを申上候。

寄書

○誤り易き言語（下）

依田雄甫

○雨ふる　雨のふる　雨がふる　雨はふる、

其意各差別あり。

○副辭の位置を誤むべし其置所によりて文意も色々になるものなり「甚不大」と「不甚大」とは其意同じからず「彼は己の才智の殊に人にすぐれたるをたのむ」と「彼は殊に己の才智の人にすぐれたるをたのむ」とも亦同じからず　凡て文章をかくには成程わかりやすき樣にすべし「多くの人がまちたる彼の船が荷物を積みて長崎より來たる」といはゞ意味明瞭ならんが「長崎より、多くの人が待ちたる、荷物を積みたる、彼の船が來たる」といはゞ甚だ解しがたかるべし　西洋諸國の文にも亦かゝる例多し。

○自動辭と他動辭とを混用すべからず、

「強盗めしとられて巡査ども打かこみて警察署にいてゆきければ云々」といふはよろしからず「強盗をめしとりて云々」又は「強盗召捕れて巡査どもに打かこまれて警察署にいてゆかれければ云々」といふべし。

伊藤伯の憲法義解にもこれに似たる誤謬のありしを朝比奈知泉君の論じたる樣おぼえたり。

○送假名寫法に注意すべし左に一二の例を擧ぐ右の方に掲げたるは正しきにて左の方なるは誤れるなり。

〔恐ラクハ　〔憤（名詞）　〔騒ガシク
〔恐クハ　〔憤ホリ　〔騒シク

○假名づかひに注意すべし　右方は正　左方は誤

〔をんな（女）　〔をとこ（男）　〔みさを（操）　〔ゆゑ（故）
〔おんな　〔おとこ　〔みさほ　〔ゆへ

〔はふぐわい（法外）　〔らふそく（蠟燭）
〔ほうがい　〔ろうそく

かゝる文字を穿鑿せば其種類猶あまたあるべし爰には只其一斑をしるすのみ。

我日本人殊に婦人諸君よ諸君の中には巧に英佛の文をつゞる人もあるべし深く羅甸希臘の語に通ずる者もあらん然れどもこれと同時に我日本の言語をも知らざるべからず我日本の言語は我日本人のしらざるべからざる言語なり。　（完）

新報

○婦人雜誌の不德

此頃ろ女性に關する一二の雜誌及び新聞紙上に於て、娼妓藝妓の事を明らさまに記載するのみか、更らに之を德とし、更らに之を賞賛するものあり、之れ何等の狂妄乎、彼等は女德を進め、女風を醇化せんとすと宣言す、而して其の爲す所ろは一々彼等が宣言を打消すなり。世上幾多の小新聞雜誌中間々不德なる記事を掲ぐる者あるを見、固より喫驚するを少なきにあらずと云へども、如此く直接に婦女に關するの雜誌新聞にして斯の如くに不德ならんとは更に痛恨に堪へず、世上先覺の女性須からく之を退ぞくべし、父兄たるもの宜しく注意すべし、彼等は察しろ流行に假りて利を射るものにあらざるなきか。

○猥褻の繪畫

當路の人彼の繪草紙屋の店前に弔下げたる、醜極猥褻の婦人畫を見ざるか、子供を作ふ母親は最早之に近づきがたし其清き愛兒に問はれたるときは何と答ふべき雜誌類を買はんとする女學生も最早之に近づきがたし偶然之を見たらんには何如に恥かしからん、況んや外國人にして若し之を見、特に外國人中の來客などに見られんには抑も日本を何如せん、風俗を取締まる所ろの有志切に注意あらんとを祈る。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

○貸座敷の新設　　津久井生

女學記者足下生は茲に哀むべき一報を呈せざるを得ず、乃は此頃風說に聞くが如んば東京に程遠からぬ下總國市川驛に（近傍に教導團兵營あり）新に貸坐敷を建設せんとして、該地方の有力者等諸方に奔走し○○を以て同意者を募り○○の勢を以て輿論を故造し近々願書を其筋に差出さんと專ら計畫中なる由、嚮きに岐阜に於てこの噂さ起るや、貴社雜誌を始めその他世の新聞雜誌上に之が非爲たる所以を論じ許可せられざるを希望せしもの多かりしが、遂に正義の輿論を喚び起すに足らざりしを今に痛歎して止まざりしが、今日また此報あるに接し記者は如何なる感情を起さるゝや。

義の大陽未だ東洋に洽く輝かずと雖ども明治の聖代にかゝる不道德破廉耻の事業を企て恬として耻づる所なきは豈惡むべきの罪ならずや、果して此事にして愈々その筋に請願するに至らんには余輩は飽くまで其非を鳴らさずんばあるべからず、一方に於ては高知縣の如き、既に貸坐敷を全廢するに決し群馬縣の如き重税を課して漸次之を廢止せしめんさしつゝあるに當り、一方は新規開業を許可し剩さへ縣會はその諮問に同意を表し、既に佐倉の如き岐阜の如き先例あれば今回の如き愈々出願に及はゞ或は許可せられずと限るべからず、穴恐ろしき世の中なる哉。

一昨年の暮東京より南東なる或る縣にては新たに貸坐敷營業を許せしが當時の事情をしてもし新聞紙上に掲載せしめなば東西新聞の二の舞なきにあらず、而して又今回市川の貸坐敷計畫の如きも之に類するの狀なきや否や○の勢ひ力ありさ謂ふべし噫々。

○盲人政談演說會

去る十六日より、京橋區新肴町の開化亭に於て、盲人政談演說會を開きたる由にて、其演題及び辨士は忘るゝ勿れ日本の二字、泰西の文明（青柳杏仙氏）憤んで憲法を讀む、國民の希望（寺内久吉氏）輿論の勢力、國民の決心（額賀作次郎氏）日本魂、止むを得ざればなり（杉山應藏氏）國の獨立、愛國心（野口清吉氏）等にて傍聽無料下足二錢の由なりさ云ふ。更に角注目すべき一新現象なり、有眼の人決して怠慢ある可らず。

○盲人就產會

岩手縣下水澤地方は漁網の產地なるより該地方の盲人は網製造を以て業とせり米澤地方は紬織の產地なるにより該地の盲人は真綿を繰り糸を製し雄勝濱に住する盲人は石版摺を以て生活を營み居れり迄れば此度靑森縣下靑森市の盲人熊谷某は茲に感あり盲人就產會なる者を設け各自適當の實業を營み盲人をして恒業に安ぜしめんさの目的より盲人就產會なる者を興さんとの企てありと

更に報ずるものあり、云く、

完躰にして坐食するもの當に慚死すべし。

○日本演藝協會

演藝矯風會を改めて演藝協會とし、役員を左の如く改定し、近日第四次演習會を催うすよし也、

會長

正、子爵　土方久元　副、子爵　香川敬三

事務委員

岡倉覺三　岡野碩　太田原則孝　高田早苗

下村善右衛門　森田文藏　關直彦

文藝委員

岡倉覺三　依田百川　高田早苗　坪内雄藏

黒川眞賴　山田武太郎　古河默阿彌　小中村清矩

饗庭與三郎　森田文藏　森林太郎　關直彦

關根正直

技藝委員

市川團十郎　市川左團次　花柳勝次郎　豐澤團平

放牛舍桃林　常盤津小文字太夫　尾上菊五郎　河東秀次郎

談洲樓燕枝　高野茂　實山左衛門　鶴澤豐造

中能島松聲　山勢松韻　松島庄五郎　松永鐵五郎

松永和楓　藤間勘右衛門　荒木古童　杵屋正次郎

清元延壽太夫　清元葉　岸澤式佐　都一中

桃川如燕　竹本綾瀨太夫　三遊亭圓朝

演習委員

田村成義　罔野秀俊　守田勘彌

理事

庶務　岡野碩　會計　大木保樹

○孤兒院

江藤正澄嵜與一郞上村初五郞西卓爾諸氏の發起にて筑前上坐郡比良松に設置せる博濟孤兒院は開會の初めより日田より一名生葉竹野に一名御井御原山本より一名久留米市より一名穂波より一名を養育する筈なりさ。而して當初世に配りたる

其の設立趣旨書は左の如し

物の均しからざるは物の情也生存競爭は理の常也と雖ども細かに仁慈の眼を注ぎ社會の情况を觀察するに貧窮困厄姦惡無賴天幸の何たるを知らず一生の間不善至らざるなく疾痛慘憺の悲況に呻吟する者常に多きに居るは（按明治十九年統計年鑑に據れば餓死者一千二百卅六人捨兒四千五百五十六人）轉た愛憫すべきの事たり就中依賴するに處なく剩へ家貧困にして蚤く父母の照翼を離れたるの哀むべく憫むべき孤兒の如きは最も酸鼻に堪へざる所なり彼等は自助力なきに依らず懶惰淫逸の自業自得に非らず生ながら薄命なり彼等は愁眉を顰めて生れ悲哀の人に造られたり恰々として甘き乳を探れども早巳に慈母に死別し父と呼び母と號泣すれども普天の下十四億萬の大衆に汝母は玆に在り汝父は我也と答ふる者なし彼幸にして天父の愛護を被り富家に敎育せられ稍々東西を辨ずるに至れば高尙優美の良知は萎縮して賤夫劣奴となり或は乞食となりて街路に彷徨し或は蕩子となりて惡漢に通じ幼兒の素は漸次藍に入り藍より濃かなる第二の天性を訓致し多々益々放蕩無賴に陷り廉耻を破り良心を壞滅し人道の何たるを知らず終に社會を蕩亂し良民を殘害するに至る今古滔々皆然らざるなし知らずや石川は十歲の時に親に死別し而て至孝の天性は忽ち彼が如きの兇漢に豹變せしを矣親よ鼠小僧亦た棄兒に非ずや尙之を現今に徵し實驗に照らし經驗ある識者に質さば余が言の決て妄ならざるを知るべきなり余嘗て一友人の許に至る談偶々孤兒に及ふ友人案を拍て曰生嘗て國事犯罪を以て二年間（明治十年五月一日乃至十二年四月卅一日）大坂監獄に繫かれしとき幼年檻の敎育を命ぜられたり在檻囚徒五六十因て其父母のことを問ふに十中八九は兩親を完有せる者あるとなく多くは叔伯の手に鞠育せられたる者なりと。

嗚呼實に温順柔和の孤兒一朝變じて虎狼の奸賊と化し天與の美質を破り靈妙の良知を缺ぎ忌むべく恐るべき蛇蝎の惡徒となる誠に哀むべく憫むべしと雖も蓋し止むをえざるの勢なり然と雖ども吾人は知ざるべからず彼は生ながらの惡漢兇徒に非らざることを唯だ曲れる嫩芽を矯正する慈母の保訓嚴父の戒飭なく之に加へて懇々たる良師の薰陶なきに是れ依れる也果て然らばかゝる殘忍の悲淵に溺れ塗炭の境に號泣する夥多の孤兒を眺め吾人惻惕惻隱の心ある者豈に默々に附するに忍びんや必らずや之れが救濟の道を講ぜずんばあるべからず吾人同胞の義務として彼孤兒弟妹等を救濟し其陷惡を防護するには誠意彼に父たる信實彼に母たる兄姉其人あるに非らずんば到底能はざるべし然らば此憐むべき孤兒の父たり母たる者は果て何人ぞや愛國の仁人貴兄等之れが父たるに非ずして他に求むべきなし矣慈眼愛腸の貴姉等其母さなるに非ずして誰にか望まん哉唯だ天下の憂に先ちて憂ふるの志士を父とし天下の樂に後れて樂むの淑女を母とせば則ち將來恐るべきの惡漢兇徒を人爲的温厚篤實の君子となし憐むべき凍餓の民をして殖産興業に從事し國家富强の一助たる良民と化せしめ粗野不熟の風を變じて高尙優美の俗となし以て天與の幸福を完ふせしむべきは吾人晉而保する所也故に余不肖を顧みず此憐むべき同胞たる孤兒に代て哀訴す江湖諸兄姉同胞相憐むの誠意丹心の存するあらば各々苦んで之を爲さず喜んで應分の盡力救助をなし彼等の爲に一滴の愛淚を垂れ玉はゞ余之を聚合して蒼々たる北海となさん諸兄姉彼等の爲に一小粒の愛恤を賜はゞ余之を集積して南山となし以て孤兒の賴なき者を救濟し併て敎育を授け人生の幸福を完ふせしめんとす仰ぎ願くは上は上帝の冥助に依り廣く博愛慈善家の賛成を得て本院の目的を達せんことを祈云爾。

明治二十二年七月

○公園改良の事

公園改良の事實に必要なり、彼の不忍の池畔に馬場を廻らし、山内の森頭に紅葉舘を建つるの類、之れ公園を以て私人の庭とするなり、文明國民の恥辱として甚はだしき事と云ふべし、然るに今まや府知事は其の改良を必要として之が爲めに委員を擧たりと聞く尤もあるべきと也。

卮 ゝ

○明治女學校高等科　今週間よりいよ〳〵開設せられたるに同校普通科の卒業生の外に西京同志社女學校の卒業生師範學校女子部卒業生等來學あり主も邦語の口授にして傍ら英書を參考用にせらるゝ由、而して昨日午後二時よりは島田三郎氏社會學の科に於て歐米巡遊中の女況に付き演說ありし由也。

○櫻井女學校　は從來の校舍追々手狹さなるに付上六番町元と別校ありし地に新校舍を築き移轉ありたり。

○鶴岡婦人義捐會　同地の町野みゑ、酒井清瀨、進藤こう等の諸女氏發起となりて同會を設け每木曜日に相會して義捐の爲に編物等を造らるゝ由。

○女生徒の上京　筑後三池郡は追々女生徒の進步著しく笈を負ふて各地に遊學する女子の漸次輩出するは賀す可きことにて現今福岡英和女學校にて勉强中なるは濱田チセ多賀小鈴榊小枝の三女子、長崎スチール女學校には佐々木某女外一名、柳河橘蔭學舘には永江某女外數名なるが今度松岡トモ南部テチの兩女は長崎活水女學校に、吉武ヨシ女は橫濱女學校に、三原シカ女は福岡英和女學校に、椎名キヨ女外五名は近々上京の途に就く筈なりと（九月十一日福岡日々新聞）

○皇女降嫁　英國皇太子殿下の長女ルイズ殿下には去七月廿七日蘇格蘭貴族フハイフ伯爵に降嫁せられ同伯爵には直に公爵を授けられしを以てルイズ女王殿下はフハイフ公夫人と稱せらるゝ由其結婚式はバッキムハム王宮附屬の小院にて半國禮を以て行はせられ女皇陛下にも臨御在らせられたりと。

廣　告

私立
横濱フェリス女學校

本校今舍新築落成し空氣淸く地位高く眺望佳絶なる處ろに四層樓聳え洋婦人女敎師皆な同舍して寄宿生を看護し敎場は尤も注意して結構し相應の器具を備へたるに付女生の來學には便益少なからずと自信す○九月十日より業を始むるに付き英學初歩の生徒ハ遲くも同二十日迄に入學あるべしより後るれば許容することなし。又た少くも二年以上英語を學びたる生徒は何時にても學力試驗の上へ入校を許すべし

束修二圓○通學生授業料二圓○同寄宿生授業料一圓五十錢○食料三圓○室料油費入湯雜費等五十錢○豫科二年本科四年高等科二年合計八年にて卒業

此他精細に承知ありたき方ハ幹事に向け問合を乞ふ

横濱山手百七十八番　フェリス女學校幹事

A gentleman—Doctor of Philosophy, graduated in German University and was also in Kōbudaigakko, 26 years old, agreeable complexion, speaks English and German, income 1,200 to 2,400 a year—wants to have acquaintance with a lady ageing from 17 to 25 and possessing a property not less than 10,000 Y., for the purpose of later marriage.

Reference and Photograph to the office of Jogaku-Zasshi, addressed: Mr. A. B.

Great secret is secured. Photo. returned when required.

和歌山縣
水害救助義捐金募集廣告

拜啓陳ハ既ニ諸新聞紙上ニ於テ御承知ノ如ク今度紀伊高雄山ノ山洪波紀ノ川有田川其他諸川ノ出水ハ前古未曾有ニシテ其災害ハ紀州一圓ニ亘リ不慮莫大ノ災害ヲ被リ其慘狀タル實ニ言語筆舌ノ盡シ能ハサル所ニシテ堤防ヲ決潰シ橋梁ヲ破碎シ田畑ハ一變シテ沼地沙洲トナル人畜ノ死傷數千家屋ノ流失數萬產ヲ破リ流離困苦ヲ極ムルモノニ至テハ數フベカラズ今之ヲ救濟スルハ人性ノ至情ニシテ人類ノ義務ノ存スル所ナリ我會平素友愛ヲ以テ主義トスル者豈ニ袖手傍觀スルニ忍ビンヤ是ヲ以テ我會微力ヲ盡シ廣ク世ノ慈愛ニ富メル諸兄姉ニ訴ヘ義捐金ヲ募集シ一時ノ危急ヲ救ハント欲ス請フ四方ノ慈善家諸君ヨ左ノ方法ニヨリ金額ノ多少ニ拘ハラズ義捐アランヿヲ切望ノ至ニ堪ス候謹言

一　義捐金ノ金額ハ多少ヲ問ハス左記ノ內ヘ御屆被下度候事

一　義捐金ハ現金或ハ郵便爲換又ハ銀行切手ニテ義捐者諸君ノ姓名ハ締切後之ヲ基督敎新聞ニ廣告シ別ニ受領書ヲ呈セザルベシ

一　義捐金締切期限ハ九月三十日トス

一　義捐金取纒ノ上ハ之ヲ當局者ニ送附シ難民救助ヲ依賴スベシ

一　當局者ヨリ金額領收若クハ分配ノ證ヲ得タル時ハ其詳細ヲ基督敎新聞ノ紙上ニ報告スルヿ

東京深川區相川町二十番地　山內量平
同　京橋區加賀町警醒社　福永文之助
同　芝區三田聖坂町六十八番地　久野宗照
同　麴町區有樂町三丁目一番地　河島悌次郎
同　赤坂區青山南町三丁目五十三番地　松島剛

明治二十二年九月　友愛會

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

遞信省認可

交詢案内（乙）

（催促する勿れ郵劵十錢送れ委細に申來れ）

●雇はれたき方

十三	教師	栃木縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御内にても教授に雇はれたきものあり可成くは麴町か駿河臺邊を望む
一九	召使	裁縫の教授を専にし其他女子學校等監督兼留守居樣の者に雇れたし
二四	奉公	・年齡廿二才にして一と通り裁縫もいたし氣輕の生れつきにて華族樣か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は壹圓以上に願ひたし
二五	裁縫	裁縫は重もに婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他高貴の御内に教師に雇はれたし
二八	奉公	普通小學科卒業の者にて（年齡二十二才）産婆業を営まるゝ基督信徒の家に無給にて雇はれ余暇に産婆術を學び度ものあり
二九	奉公	年齡十四歲にて基督教信徒の家（可成は西洋人）に雇はれ度ものあり尤も普通食料小使仕着等一切持參致すに付き毎日四五時間英語學の修業致したし
三〇	通辨	年齡廿四歲にて貴婦人方の英語の通辨として雇はれ度ものあり
三一	奉公	廿一二才のキリスト信者にて裁縫を教へ家内の手助けをなし四時間通學を爲し得る家に無給にて雇はれたきものあり
三五	奉公	年齡十五才の高等小學卒業生にして余暇に勉學の出來候御宅へ雇はれ度ものあり但し給料は望みなし

遊のくら

定 價

新しい謎,やすくてできぬ
考物,ふかしくてたまらぬ
あごはづし,手がるで不思議で
而して素人の知らぬ和洋のてづま

英語の謎
拾貳錢

Emgma, Puzzles, etc.

くろんぼう著
東京 金港堂 本町
全壹册

發兌

九月 七日 十四日 廿一日 廿八日
十月 五日 十二日 十九日 廿六日
十一月 二日 九日 十六日 廿三日 三十日
十二月 七日 十四日 廿一日 廿八日

定價

一册。六錢 郵稅。一錢（但府内無郵稅）
十册。五十八錢郵稅。十錢（同前）
半年分 一圓四十三錢 府外は 一圓六十九錢
一年分 二圓六十錢 府外は 三圓十二錢

廣告

一行 一回 前金拾錢（廿七字詰）
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる書物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.69 six month *yen* 3.12 per annum, in advance.

Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, Kyobashiku, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京京橋區彌左衛門町殿々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町裒明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本鄕區元冨士町盛春堂○同本鄕區春木町二丁目解明堂○同本鄕四丁目文壽堂○横濱住吉町角田星貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彥根西內大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年九月十九日印刷
明治二十二年九月廿一日出版

東京京橋區日吉町八番地
發行所 女學雜誌社

東京京橋區日吉町八番地寄留
編輯兼發行者 巖本善治

東京芝區源助町十一番地寄留
印刷者 森田豐